

国内外におけるひきこもりに関する概念の整理 および研究の動向と今後の課題

小橋 亮 介¹⁾

はじめに

近年、長期にわたって就学や就労などの自宅以外での活動から退き、社会的な参加の場が狭まる「ひきこもり」の青年の増加が注目を集めている。ひきこもりは、満15歳から満39歳までには約54万人（内閣府、2016）おり、満40歳から満64歳までには約61万人（内閣府、2019）いると推定されており、わが国において大きな社会問題となっている。それに加えて、ひきこもりは海外においても存在していることが報告されており（e.g., Wong, 2009）、ひきこもりは今後、世界的な問題となる可能性があると考えられる。

また、全国ひきこもり家族会連合会が行った調査によると、ひきこもっているものの平均年齢が36.8歳、ひきこもりの期間が平均8.1年と報告され、ひきこもりの高齢化・長期化が問題となっている（KHJ全国ひきこもり家族会連合会、2019）。さらに、ひきこもりは精神障害と関連があり、広汎性発達障害、強迫性障害を含む不安障害、身体表現性障害、適応障害、パーソナリティ障害、統合失調症などが関連するものとして挙げられる（齊藤他、2010）。しかしながら、ひきこもるものはひきこもりの特徴のために支援に繋がりにくいことが大きな問題である。実際に、近藤他（2010）の調査では、ひきこもりの開始から相談開始までの期間は平均で4.4年であり、調査の対象となったひきこもり相談事例339件の内、155件は本人が来談していなかった。これらのような、ひきこもり問題、対応の難しさを考慮すると、ひきこもりの予防や早期の支援を模索することが重要である。

ひきこもりに関する研究は、これまで数多くなされて

きているが、ひきこもりに関する概念が多く、それらを整理する必要性が示唆されている。Rubin & Coplan (2010 小野訳 2013) では、ひきこもり²⁾ 研究においては概念の明確さに欠けるという問題があり、まちまちに定義された多くの用語があるために混乱が生じていると述べられている。国内のひきこもりについては、村澤（2017）が述べるように、ひきこもりという概念は拡大を続けており、過度の拡大によって概念が曖昧になっていることも考えられる。例えば、ひきこもりについて、齊藤他（2010）や内閣府（2016、2019）の定義が存在しており、その中でも内閣府（2016、2019）は複数のひきこもりに関する概念を示している。さらに、東京都青少年・治安対策本部（2008）によれば、実際にひきこもってはいないが、ひきこもる人の気持ちがわかる、自分もひきこもりたいと思うもののことである「ひきこもり親和群」の存在も示されており、ひきこもっていないものの中にもひきこもりのような特徴を捉えようとする動きもある。したがって、これまでの知見を活かすためには、国内外におけるひきこもりに関する概念を整理する必要がある。

ひきこもりの支援に関する研究も数多くなされてきており、レビュー論文も執筆されてきた。例えば、佐藤（2018）は、ひきこもり支援の変遷を年代ごとに概観しており、久保（2019）は、ひきこもりの家族支援に関する研究をまとめている。これらの研究は、ひきこもり支援の現状を整理し、課題を示した点で意義があるが、示されている支援としてはひきこもりが起ってからでの支援が前提とされている。そのため、中地（2016）が指摘するように、ひきこもりの予防や早期の支援についての研究が少ないことが考えられる。

ひきこもりを早期の支援に繋げるためには、将来のひきこもりの背景要因となり得る特徴に着目することが1つの方法として挙げられている（野村、2013）。国内ではひきこもりの背景要因についてまとめられた研究があまり見られないが、海外で発表されたひきこもりに関する文献をレビューした谷田・青木・岩藤・古志（2016）や、

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士後期課程（指導教員：平石賢二教授）

2) 海外のひきこもり（social withdrawal）について、本研究においては、野村（2013）と同様に臨床心理学的な視点に立つため、social withdrawalをひきこもりと訳した。

海外のひきこもり研究をレビューしたRubin, Coplan, & Bowker (2009) では、ひきこもりの背景要因がまとめられてきた。しかし、谷田他 (2016) が述べているように文化的な要因の影響も存在しているため、国内外でひきこもりの捉え方が異なる可能性がある。したがって、海外のひきこもり研究の知見をそのまま国内のひきこもりに対して適用することには慎重になる必要があるが、海外のひきこもりに関する先行研究の動向および課題を明らかにすることで、国内のひきこもり研究における今後の指針が得られることが考えられる。

以上より、本研究では国内外におけるひきこもりの先行研究についてレビューを行い、ひきこもりに関する概念を整理する。その上で、主にひきこもりの背景要因についての国内外の研究動向および課題を明らかにし、ひきこもりの予防や早期の支援を模索するための指針を示すことを目的とする。

ひきこもりに関する概念

国内におけるひきこもりに関する概念

わが国において広く用いられているひきこもりの定義は、齊藤他 (2010) の「様々な要因の結果として社会的参加（義務教育を含む就学，非常勤職を含む就労，家庭外での交遊など）を回避し，原則的には6ヶ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態（他者と交わらない形での外出をしてもよい）を指す現象概念である。なお、ひきこもりは原則として統合失調症の陽性あるいは陰性症状に基づくひきこもり状態とは一線を画した非精神病的な現象とするが、実際には確定診断がなされる前の統合失調症が含まれている可能性は低いことに留意すべきである」という定義である。ひきこもりはあくまでも社会現象の1つであり、ひきこもり概念に含まれる領域は非常に広いが、齊藤他 (2010) が強調しているのは、当事者や家族が大きな不安を抱えるようになった場合についてである。つまり、この定義に当てはまっていたとしても、療養のために家庭にとどまる必要がある場合や、当事者および家族がそのような生き方を受容している場合（例えば、主婦、家事手伝いなど）には支援は必要ではなく、ひきこもりに陥ってしまったために、当事者および家族が大きな不安を抱えるようになった場合に支援が必要となるのである。齊藤他 (2010) は、このような支援を必要としているひきこもりのことを「ひきこもり」として述べていることに留意すべきであろう。

一方、内閣府 (2016, 2019) では、統合失調症または身体的な病気、妊娠などの理由を除き、6ヶ月以上自宅

からほとんど出ないなどの状態に陥っているもののことを「広義のひきこもり」としている。広義のひきこもりには、その行動範囲によって、2つの下位分類が存在するとされており、1つ目が「狭義のひきこもり」である。狭義のひきこもりとは、ふだんは家にいるが、近所のコンビニなどには出かけるものまたは、家や自室からほとんど出ないもののことを指している。2つ目が「準ひきこもり」であり、ふだんは家にいるが、自分の趣味に関する用事の時だけ外出するもののことを指している（内閣府、2016, 2019）。すなわち、他者と交わらない形での外出をしてもよいひきこもりの中でも、外出する範囲が狭いのが狭義のひきこもりであり、それに比べて相対的に外出する範囲が広いのが準ひきこもりであると考えられる。なお、準ひきこもりという概念は、一部の大学生が取る非社会的行動の一種として樋口 (2006) が提唱したとされている。樋口 (2006) と内閣府 (2016, 2019) の準ひきこもりでは、当事者が大学に通えているという点で異なるが、ほとんど社会参加をせず、他者との交流が極めて少ないという点および他の側面はほぼ同様であるため、類似の概念と捉えるのが妥当であると考えられる。

以上のひきこもりに関する概念には、統合失調症の症状に基づくひきこもり状態は含まれていないが、既に述べたようにひきこもりは様々な精神障害との関連があるとされている（齊藤，2010）。しかし、精神障害が見られないひきこもりが存在することも指摘されており、諏訪・鈴木 (2002) は、精神障害が見られないひきこもりを「一次性ひきこもり (primary hikikomori)」としている。それに対して、ひきこもりの背景にうつ病や強迫神経症、人格障害が存在し、その症状の1つとしてひきこもりが二次的に現れるのが「二次性ひきこもり (secondary hikikomori)」(諏訪，2006) とされている。諏訪 (2006) によると、一次性ひきこもりが増加しており、ひきこもりは単なる精神病的な問題だけではなく、その背景には家族関係や日本の文化、社会情勢が影響をしていると述べられている。一方で、齊藤他 (2010) では、ひきこもりにおける精神障害について、大半はひきこもりの原因の1つとなったものであるが、中にはひきこもりの中で発症したものも含まれるとされている。また、精神保健福祉センターのひきこもり相談において(近藤, 2010) は、当事者が来談した事例の大半に精神障害の診断が可能であることが示されている。そのため、諏訪 (2006) が述べる「一次性ひきこもり」のものであったとしても、精神障害である可能性を意識する必要があるだろう。

さらに、ひきこもりは特殊な問題ではなく、現代の若者のもつ特徴や問題を反映した現象であるとされ（斎

藤, 1998), 実際にはひきこもっていないものの中にも、ひきこもりに近い特徴を持つものが存在すると考えられる。東京都青少年・治安対策本部 (2008) の調査では、ひきこもりに対して親和的な考えを持ちながら、実際にはひきこもっていない「ひきこもり親和群」と呼ばれる人々が存在することが示されている。ひきこもり親和群とは、実際にはひきこもっていないにもかかわらず、ひきこもる人の気持ちがわかったり、自分もひきこもりたいたいと思うものことである。具体的には、4件法の質問項目4つに回答をし、15点以上(得点範囲は4点~16点)およびひきこもりではない場合にひきこもり親和群であるとされる。このひきこもり親和群は、実際のひきこもりとは異なる生活上の特徴や心理的特徴を持つことが示されている(渡部・松井・高塚, 2010)が、将来のひきこもりに移行する可能性がある予備軍的な存在であることも指摘されている(東京都青少年・治安対策本部, 2008)。また、松本(2003)は、一般の大学生を対象に、ひきこもりに繋がる可能性のある心理的特性として、「他者からの評価への過敏さ」「自己否定・不安全感」「孤立傾向」の3要因を示した。この3要因は「ひきこもり傾向」としてまとめられることもあり(e.g., 草野, 2012; 塚田・幸田, 2015)、ひきこもり傾向が高い場合には自殺に対する親和性が高くなること(草野, 2012)が示されている。松本(2003)によると、これらの3要因を持つもの一部は実際にひきこもる可能性があることから、ひきこもり親和群やひきこもり傾向になってからひきこもりに陥るものが存在することも考えられる。

以上のように、国内のひきこもりに関する概念は、主に6ヶ月以上家庭にとどまっている状態を指し、行動できる範囲の違いによって当てはまる概念が異なると言える。それに加えて、精神障害の有無によっても異なる概念が存在し、実際のひきこもりではないが、ひきこもりに繋がるような特徴についても概念が存在している。

海外におけるひきこもりに関する概念

海外において広く用いられているひきこもりに関する概念は、social withdrawalである。Rubin & Coplan(2004)によると、social withdrawalは「様々な原因によって生じる、何らかの形で孤独な行動様式を説明する包括的な用語」と解釈するのが最も良いとされており、国内のひきこもりとは違い、家庭にとどまる状態やその状態が続いている期間について述べているわけではない。また、Booth-Laforce & Oxford(2008)は、Rubin & Asendorpf(1993)を参考に、ひきこもりを「馴染みのない仲間だけでなく親しい仲間会った際にも、(場面や状況に関わらず)一貫して見られる全ての孤立行動」とし、これ

を包括的な定義(umbrella definition)として捉えている。これらのような、仲間が存在しているにもかかわらず孤独や孤立している状態を広く指す概念を本論文では「海外のひきこもり(social withdrawal)」として位置づける。そして、海外ではひきこもりはいくつかの要素に分類することができる(Rubin et al., 2009; 野村, 2013)。

Rubin(1982)は、自ら孤立していく「ひきこもり(social withdrawal)」および、仲間から積極的に孤立させられる「積極的孤立(active isolation)」を広義の孤独に繋がる2つの因果プロセスとして示した。また、このひきこもりは、2つの下位類型に分類され(野村, 2013)、情緒的な調節不全によって社会的な相互作用における恐怖や不安を制御できない場合と、孤立することに恐怖や不安を伴わない場合に分類される。前者の中には「行動抑制(behavioral inhibition)」(e.g., Garcia-Coll, Kagan, & Reznick, 1984; Reznick, Hegeman, Kaufman, Woods, & Jacobs, 1992)や「シャイネス(shyness)」(e.g., Asendorpf, 2008)など、新奇場面における警戒や恐怖を感じるような特徴が含まれる。そして、後者には「社会的無関心(socially disinterested)」(e.g., Coplan, Girardi, Findlay, & Frohlick, 2007)など、単に1人が好きであることや孤独を好むことが含まれる。

このように、海外のひきこもりに関する概念は、国内のひきこもりに関する概念が家庭にとどまる状態が続いていることを指すことが多いのに対し、仲間が存在しているにもかかわらず孤独や孤立している状態を広く指している。また、そのような状態に陥るプロセスや原因のような下位分類の概念が多く存在しており、具体的に行動できる範囲などには言及をしていない。国内外のひきこもり概念には、こうした違いがある一方、Rubin et al.(2009)では、ひきこもりに陥る原因として自己否定や孤独感などの内的要因があるとされている。これは、松本(2003)の3要因と重なる部分もあるため、国内と海外のひきこもりは異なっているだけではなく、重なっている側面があると考えられる。つまり、海外のひきこもりに関する概念やこれまでの知見が、家庭にとどまる状態が続くとされる国内のひきこもりにも適用できる側面があることが推測される。

ひきこもりの背景要因についての研究

続いて、これまでの先行研究の知見から、ひきこもりおよびひきこもりに関する概念の背景要因となり得ることが想定される変数についてまとめる。

国内におけるひきこもりの背景要因についての研究

デモグラフィック変数 ひきこもりとの関連が報告されているデモグラフィック変数は、性別、年齢および不登校の経験である。性別について、内閣府（2016, 2019）の調査によると、実際のひきこもりは男性の方が女性よりも多いことが示されている。しかし、ひきこもり親和群については女性の方が男性よりも多いことが示されている（内閣府, 2016）。また、松本（2003）および草野（2012）では、ひきこもり傾向において、男性では「孤立傾向」が高く、女性では「他者からの評価への過敏さ」が高いことが示されていた。これらは、男性は実際にひきこもる傾向があるが、女性は内的にひきこもることでひきこもりが顕在化せずに、ひきこもりを内在化させるという知見（鈴木・小木木, 2000）と一致する結果である。女性はひきこもり傾向があったとしても、人間関係で圧迫感を感じながら交流を楽しんでいるものもいるという報告（矢嶋・根本, 2002）や、人間関係において困難を抱えていても、その人間関係を維持することで社会に適応しようとしているという指摘（塚田・幸田, 2015）があることから、実際にはひきこもっていないか、ひきこもり傾向のような心理的特徴を持つ女性に対する支援も必要であることが考えられる。

年齢および不登校の経験に関して、斎藤（1998）では、ひきこもりは20代後半までに問題化するとされている。また、ひきこもりは思春期心性と強い関わりがある（斎藤, 2010）とされ、ひきこもりの中での6~8割は不登校を経験しているとされている（井出, 2007）。内閣府（2016）の調査でも、満15歳から満39歳のひきこもりのきっかけとして、具体的な記載がなかったなどのその他を除けば、不登校が最も多いことが示されている。

しかし、ひきこもりは30歳を過ぎても半数近くに減るだけという指摘（倉本, 2003）や、既に述べたようにひきこもりの平均年齢が36.8歳、ひきこもりの期間が平均8.1年との報告（KHJ全国ひきこもり家族会連合会, 2019）がされており、ひきこもりは高齢化・長期化していることが考えられる。内閣府（2019）の調査では、満40歳から満64歳までに約61万人のひきこもりがおり、満15歳から満39歳までよりも多いことが示された。そのきっかけとしては、退職したことが最も多く、人間関係がうまくいかなかったこと、職場になじめなかったことも上位であることから、職場での問題がきっかけとなっていることが推測される。

このように不登校の経験が大きく影響していること、思春期や青年期にひきこもりに陥りやすくなることが考えられる一方で、幅広い年代からひきこもりに陥る可能性があるため、中年期以降のひきこもりについての検討

も望まれる。

個人内要因 ひきこもりと関連する個人内要因について、ひきこもりの家にとどまるという特徴のために、ひきこもり本人を対象とした研究はあまり多くない。臨床的な観点からは、自己愛の問題（忠井・本間, 2006）や対人恐怖（斎藤, 1998）、対人関係に関する極端な信念や思考（斎藤, 2002）などが挙げられているが、これまでの研究では、様々な状態や背景を持つひきこもりが一律にひきこもり本人として扱われており、汎用性に限界があるとの指摘（古志・青木, 2018）がある。これらから、ひきこもり本人の特徴を理解するために、ひきこもり親和群やひきこもり傾向に関する検討がなされてきた。

例えば、塚田・幸田（2015）では、ひきこもり傾向と自己愛の関連について検討されている。その結果、誇大性の自己愛はひきこもり傾向を抑制すること、過敏性の自己愛はひきこもり傾向を促進することが示されている。また、新井・弘中・近藤（2015）では、社会場面における恐怖感や不安感がひきこもり親和性を高めること、対人的自己効力感がひきこもり親和性を低めることが示された。これらからも、ひきこもりには自己愛、社会場面や対人関係における恐怖や不安に関連していることが考えられる。さらに、注意バイアスとひきこもり傾向の関連を検討した小橋（2019）では、ポジティブな刺激に注意を向けることによって、ひきこもり傾向を低減させることが示されている。脅威刺激に対する注意のバイアス、つまり脅威刺激に注意を向けやすい特徴が実際のひきこもりのリスク要因になることも示唆されており、斎藤（2002）がひきこもりには極端な信念や思考があると述べているように、ひきこもりには脅威を感じる刺激やネガティブな刺激に注目しやすい信念や思考のバイアスがある可能性がある。他にも、ひきこもり傾向と人生の意味、目的意識との間に関連があることが示されており（草野, 2012）、人生に意味や目的を見出すことでひきこもり傾向が低減されることが示唆されている。なお、これらのひきこもり親和群およびひきこもり傾向を扱った研究は、いずれも一般の大学生を対象としたものである。

他方、少ないながらもひきこもり本人を対象とした研究もなされてきている。蔵本（2008）は、ひきこもり本人の特徴として、対人交流開始の困難、こだわりの強さ、対人交流維持の困難、感情的冷淡さ・無関心の4つを挙げており、ひきこもりの背景に対人関係の問題があることを示唆している。渡部他（2010）の研究では、ひきこもりとひきこもり親和群について、ひきこもりは対人恐怖と暴力がある傾向、ひきこもり親和群はうつや罪悪感を抱えており、自己決定への他者からの干渉を避け

る傾向があることが示されている。また、ひきこもりとQOL (quality of life) との関連 (野中・境, 2014)、自己変容を志向する傾向があること (古志・青木, 2017) もひきこもり本人を対象とした検討によって示唆されている。

環境要因 ひきこもりと関連する環境要因について、個人内要因と同様に、臨床的な観点から家族との関係 (田中, 2001) が挙げられている。ひきこもりに繋がる家庭環境についての検討を行った Umeda & Kawakami (2012) は、ひきこもりのサンプルが非常に少ないという限界があるが、親の学歴の高さや母親のパニック障害がひきこもりのリスクになることを示している。また、山本 (2008) では、親と遊んだ記憶の乏しさおよび親からあまり信頼されていないと感じることがひきこもり傾向に繋がることが示唆されている。

他にも、国内のひきこもりと大学生を対象に検討を行った Krieg & Dickie (2013) は、親からの拒否がアンビバレントな愛着およびいじめなどの仲間からの拒否に影響し、それらがひきこもりのリスクになり得ることを示している。さらに、青山 (2014) では、ネットいじめの経験がひきこもり親和性と関連していることが示唆されている。これらに加えて、ひきこもり本人の気持ちと家族とのすれ違いが生じる状態から、家族が受容的であると感じるようになると、ひきこもりに向き合う方向に動き出すことが報告されている (橋本・石村, 2016) ように、周囲から受け入れられるか拒否されるのかどうか、ひきこもりにとって重要である可能性も考えられる。

海外におけるひきこもりの背景要因についての研究

デモグラフィック変数 海外においてひきこもりとの関連が報告されているデモグラフィック変数は、性別が挙げられる。本論文における海外のひきこもりそのものではないが、ひきこもりと関連する概念として、子どものシャイネスの性差についてレビューした Doey, Coplan, & Kingsbury (2013) によると、児童期 (childhood) の中期までにはシャイネスの性差が見られないが、児童期の後期や青年期 (adolescence) には女性の方が男性よりもシャイになることが報告されている。また、特に自己報告にてシャイネスを測定した場合に、その傾向が表れることも示されている (e.g., Crozier, 1995)。さらに、ステレオタイプなどの影響によって、女性のシャイネスよりも男性のシャイネスの方がネガティブに捉えられやすく、不安や内的な問題に繋がりがやすいことが報告されており (Doey et al., 2013)、シャイネスだけでなくひきこもりなどにおいても同様であることが報告されている (Rubin & Barstrad, 2014)。

国内においては内閣府 (2016) が15歳からを対象としてひきこもりの調査をしているように、思春期および青年期からひきこもりに陥りやすくなることが想定されているが、海外ではその時期のひきこもり研究がまだ少ないことが指摘されている (Barzeva, Meeus, & Oldehinkel, 2019)。これは、Sullivan (1953 中井・宮崎・高木・鑑訳 1990) が子どもの発達における仲間関係の重要性を強調したことで、仲間と関係を作らない子どもにも関心が向いていったこと、1980年代には行動抑制 (e.g., Garcia-Coll et al., 1984) という抑制的な子どもたちの気質的特徴が注目されたことなど、海外では“子ども”の孤立および孤独からひきこもり研究が広がってきたためであると考えられる。

個人内要因 海外におけるひきこもりと関連する個人内要因については、まず生物学的要因や気質的要因がある。例えば、心拍数の高さと行動抑制 (Partridge, 2003)、脳の前頭部の機能とひきこもり (Fox et al., 1995)、コルチゾールとひきこもり (Perez-Edgar, Schmidt, Henderson, Schulkin, & Fox, 2008) など、生物学的な指標との関連が示されている。また、気質的な自己制御であるエフォートフル・コントロール (effortful control) とひきこもりが関連していること (Asendorpf, 2008)、気質的に気分や行動の制御ができない場合には、ひきこもりのリスクが高まることも示されている (Booth-Laforce & Oxford, 2008) が、ひきこもりに繋がる気質的な要因があったとしても、全てのものがひきこもりになるわけではない (Degnan & Fox, 2007) ことも報告されている。

そのため、海外のひきこもり研究では、ひきこもりや内的な問題が発生することには、元々生まれ持った個人の脆弱性に対人関係のストレスなどの環境が影響しているというストレス脆弱性モデル (diathesis-stress model) のような、複数のプロセスが影響し合っただけでひきこもりに繋がっているという考え方が広まってきている (Gazelle & Rubin, 2019)。実際に、ひきこもりと養育態度、社会情動的発達の関連を検討した Zarra-Nezhad et al (2014) では、ストレス脆弱性モデルがひきこもりの説明に最も当てはまることが示されており、1つのひきこもりの捉え方としてストレス脆弱性モデルが有用である可能性がある。個人の脆弱性のみではなく、その後のストレスについても考慮して検討を行った研究として、Smith, Hastings, Henderson, & Rubin (2019) では、抑制的な子どもであっても、自己制御 (self-regulation) ができるもしくはネガティブな情動を感じる場合が少ない場合には、後の不適応に繋がらない可能性があることが示唆されている。さらに、児童期の行動抑制と青年期

のひきこもりの関係を注意バイアスが調整していることが示されており (Perez-Edgar et al., 2010), ネガティブ刺激に注目しやすくストレスが多い場合にひきこもりに繋がることを示唆されている。したがって, 生物学的および気質的にひきこもりのリスクがあったとしても, ストレスなどの要因によってその大きさが変化することが考えられる。

環境要因 ひきこもりと関連する環境要因について, 海外では親子関係や仲間関係が挙げられている。まず親子関係について, Rubin, Burgess, & Hastings (2002) では, 抑制的な子どもに対し, 心配性な母親であればその後も遠慮を示すことが多くなるが, あまり心配性ではない母親であれば遠慮を示すことが多くなることが示唆されている。また, Hane, Cheah, Rubin, & Fox (2008) は, 母親の関わる頻度やポジティブさによって, シャイネスがひきこもりに繋がるかどうか異なることを示した。さらに近年では, 子どもの脆弱性が親の不適切な関わりを引き出し, 親の不適切な関わりが子どもの脆弱性を強めるという双方向的な影響があることも報告されている (Hastings, Grady, & Barrieau, 2019)。

仲間関係においては, ひきこもりと仲間からの拒絶および排除は関連があることがいくつかの研究で示されている (e.g., Boivin, Hymel, & Bukowski, 1995; Wei & Chen, 2008)。さらに, 友人のなさ, 友人関係の不安定さ, 仲間からの排除がひきこもりを悪化させることも示されている (Oh, Rubin, Bowker, Booth-Laforce, & Rose-Krasnor, 2008)。それだけではなく, Rubin, Kennedy, & Bowker (2010) によれば, 初めはシャイで用心深い子どもが仲間から拒絶や排除をされ, 自己非難や自分の社会的能力に関するネガティブな自己観を持つようになることで, さらなる仲間関係への不安およびひきこもりが助長されるという, 負のフィードバック連鎖 (negative feedback-loop) が生じることも示唆されている。以上から, 親子関係や仲間関係におけるネガティブな体験がひきこもりに繋がる一方で, 子ども本人の特徴やネガティブな体験の捉え方および原因帰属の方法などの要因も影響している可能性があり, 単純にネガティブな親子・仲間関係がひきこもりに繋がるだけではないことが考えられる。

まとめ

以上, これまでの国内外におけるひきこもりに関する概念の整理およびひきこもりの背景要因を中心とした研究展望を行った。その結果, 明らかになった国内外のひきこもり研究に関する現状と課題を以下にまとめ, ひき

こもりの予防や早期の支援を模索するための指針を示す。

まず, ひきこもりおよびひきこもりに関する概念について, 様々な概念や定義が存在していることが明らかになった。国内において, ひきこもりは主に6ヶ月以上家庭にとどまっている状態を指し, 行動できる範囲や精神障害の有無などの違いにより, 異なる概念が存在している。また, 実際にひきこもっていないものにもひきこもりに繋がる特徴が存在するとされ, 村澤 (2017) が指摘するように, ひきこもりという概念が拡大を続けていると言える。

その一方で, 海外のひきこもりは仲間が存在しているにもかかわらず孤独や孤立している状態を広く指し, この状態に陥るまでのプロセスや原因のような下位分類の概念が多く存在している。国内のひきこもりとは違い具体的な行動範囲や家庭にとどまる状態について言及しているわけではないが, Rubin et al. (2009) のひきこもりに陥る原因と松本 (2003) のひきこもりに繋がる心理的要因が重なっているように, 広い概念である国内および海外のひきこもりは異なっているだけではなく, 重なっている側面があると考えられる。野村 (2013) が青年・成人期のひきこもりに至るリスクファクターの1つとして social withdrawal を捉えているように, 海外のひきこもり研究の知見を国内のひきこもり研究にも適用できる側面があるため, 海外の知見を取り入れながらひきこもり概念を体系化させていくことが必要である。さらに, ひきこもりに関する概念はそれぞれ重なる部分があるが, 今後はどの概念を扱っているのかを明確に示して検討を行うことで, より知見が蓄積されていくだろう。

次に, ひきこもりおよびひきこもりに関する概念の背景要因について, デモグラフィック要因および個人内要因, 環境要因が挙げられた。村澤 (2012) や Rubin et al. (2009) が複数の要因からひきこもりを捉える必要があると指摘しているように, 個人内要因と環境要因などを組み合わせてひきこもりを理解していくことが望まれる。

これまでの国内における先行研究は, ひきこもり本人を対象とした研究は臨床的な観点からのものが多く, 実証的な研究が少ないため, さらなるひきこもり本人を対象とした検討が必要である。他方, ひきこもり傾向やひきこもり親和性を持つ大学生を対象とした研究は多くなされており, ひきこもりに繋がる特徴としてこれらについて検討することも有用であろう。また, ひきこもりを主に思春期・青年期以降の問題としているため, おのずと研究も思春期・青年期以降を対象としたものが多い。ひきこもりの背景要因となり得る変数として, 不登校の経

験、自己愛、対人恐怖などが挙げられたが、国内においてはひきこもりの原因よりも継続する理由に関心が移っていったこと（加藤，2005）もあり、それほど積極的に背景要因を検討しているわけではない。特に、家族関係については、ひきこもりの原因というよりも支援者としての役割が強調されている（e.g., 久保, 2019）。竹中（2010）が「雪だるま式の原因」と述べるように、長期化するほど最初の原因を詮索する意味がなくなる可能性があることを考えると、6ヶ月以上家にとどまる状態が続いているひきこもりの原因を特定しようとするよりも、どう支援するかを検討した方が有意義であると考えられるのは当然であろう。

それに対して海外における先行研究では、子どもを対象とした検討が多く、国内のひきこもり研究よりも低い年齢を対象としていることが明らかになった。さらに、ひきこもりの生物学のおよび気質的な背景要因についての検討が多くなされており、親子関係や仲間関係についての知見も蓄積されてきている。それに伴い、ストレス脆弱性モデルのように複数の要因が影響し合っただけでひきこもりに繋がること、負のフィードバック連鎖のようにひきこもりには複雑なプロセスが存在していることが示されていた。これらは、子どもの孤立および孤独に注目することから海外のひきこもり研究が広がっているためであると考えられ、そのために対象の年齢や着目する要因が国内のひきこもり研究とは異なり、ひきこもりの原因を探索するような構成概念および研究が多いのだろう。

最後に、以上をまとめると、国内および海外のひきこもり研究は、相補的な関係であることが考えられる。それぞれの対象年齢の違い、国内ではひきこもりについて現在の状態や支援を重視するのに対し、海外では原因を追求することを重視することなど、異なる視点からひきこもり研究を行っているようにも捉えられるが、これらははっきりと分かれているわけではない。つまり、国内におけるひきこもりの予防や早期の支援に関する研究の少なさに対しては海外の知見が参考になる可能性があり、海外の青年期や成人期のひきこもり研究の少なさには国内の知見が参考になる可能性があるのである。したがって、国内のひきこもりの予防や早期の支援を模索するためには、国内ではあまり検討されていないが海外では行われている、ひきこもりの生物学のおよび気質的な要因について検討すること、それだけではなくストレス脆弱性モデルのような複数の要因が影響し合うプロセスとして捉えること、さらには縦断研究を行うことも必要であると考えられる。ひきこもりが起こってからの支援に関する検討が重要であることは言うまでもないが、それに加えて海外の知見を用いながらひきこもりの背景要

因や原因を追求していくことで、国内のひきこもりの予防や早期の支援に繋がっていくだろう。

引用文献

- 青山 郁子(2014). 高校生・大学生におけるインターネット・携帯電話依存、ネット経験とひきこもり親和性の関連 国際基督教大学学报. 1-A教育研究, 56, 43-49.
- 新井 博達・弘中 由麻・近藤 清美 (2015). 社会不安症状と対人的自己効力感が大学生のひきこもり親和性に与える影響 パーソナリティ研究, 24, 1-14.
- Asendorpf, J. B. (2008). Shyness. In Haith, M. M., & Benson, J. B (Eds.), *Encyclopedia of infant and childhood development* (pp. 146-153). San Diego: Elsevier.
- Barzeva, S. A., Meeus, W. H. J., & Oldehinkel, A. J. (2019). Social withdrawal in adolescence and early adulthood: measurement issues, normative development, and distinct trajectories. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 47, 865-879.
- Boivin, M., Hymel, S., & Bukowski, W. M. (1995). The roles of social withdrawal, peer rejection, and victimization by peers in predicting loneliness and depressed mood in childhood. *Development and Psychopathology*, 7, 765-785.
- Booth-LaForce, C. & Oxford, M. L. (2008). Trajectories of social withdrawal from grade 1 to 6: Prediction from early parenting, attachment, and temperament. *Developmental Psychology*, 44, 1298-1313.
- Coplan, R. J., Girardi, A., Findlay, L. C., & Frohlick, S. L. (2007). Understanding solitude: Young children's attitudes and responses toward hypothetical withdrawn peers. *Social Development*, 16, 390-409.
- Crozier, W. R. (1995). Shyness and self-esteem in middle childhood. *British Journal of Educational Psychology*, 65, 85-95.
- Degnan, K. A. & Fox, N. A. (2007). Behavioral inhibition and anxiety disorders: Multiple levels of a resilience process. *Development and Psychopathology*, 19, 729-746.
- Doey, L., Coplan, R. J., & Kingsbury, Mila. (2013). Bashful boys and coy girls: A review of gender differences in childhood shyness. *Sex Roles*, 70, 255-266.
- Fox, N. A., Rubin, K. H., Calkins, S. D., Marshall, T. R.,

- Coplan, R. J., Porges, S. W., ...Stewart, S. (1995). Frontal activation asymmetry and social competence at four years of age. *Child Development*, *66*, 1770-1784.
- Garcia-Coll, C., Kagan, J., & Reznick, J. S. (1984). Behavioral inhibition in young children. *Child Development*, *55*, 1005-1019.
- Gazelle, H. & Rubin, K. H. (2019). Social withdrawal and anxiety in childhood and adolescence: Interaction between individual tendencies and interpersonal learning mechanisms in development. *Journal of Abnormal Child Psychology*, *47*, 1101-1106.
- Hane, A. A., Cheah, C., Rubin, K. H., & Fox, N. A. (2008). The role of maternal behavior in the relation between shyness and social reticence in early childhood and social withdrawal in middle childhood. *Social Development*, *17*, 795-811.
- 橋本 知佳・石村 郁夫 (2016). ひきこもり状態から回復への認知過程—家族への認知を中心に— 東京成徳大学臨床心理学研究, *16*, 113-123.
- Hastings, P. D., Grady, J. S., & Barrieau, L. E. (2019). Children's anxious characteristics predict how their parents socialize emotions. *Journal of Abnormal Child Psychology*, *47*, 1225-1238.
- 樋口 康彦 (2006). 大学生における準ひきこもり行動に関する考察—キャンパスの孤立者について— 国際教養学部紀要, *2*, 25-30.
- 井出 草平 (2007). ひきこもりの社会学 世界思想社
- 加藤 弘通 (2005). ひきこもりの心理 白井 利明 (編) 迷走する若者のアイデンティティ—フリーター, パラサイト・シングル, ニート, ひきこもり— (pp. 189-213) ゆまに書房
- KHJ全国ひきこもり家族会連合会 (2019). ひきこもりの実態に関するアンケート調査報告書 平成30年度生活困窮者就労準備支援事業費等補助金社会福祉推進事業「長期高齢化する社会的孤立者 (ひきこもり者) への対応と予防のための「ひきこもり地域支援体制を促進する家族支援」の在り方に関する研究」
- 小橋 亮介 (2019). 大学生のひきこもり傾向とエフォートフル・コントロールの関連における注意バイアスの影響 パーソナリティ研究, *28*, 128-139.
- 近藤 直司 (2010). 青年期のひきこもりと発達障害 心身医学, *50*, 285-291.
- 近藤 直司・清田 吉和・北端 祐司・黒田 安計・黒澤 美枝・境 泉洋…宮田 量治 (2010). 思春期ひきこもりにおける精神医学的障害の実態把握に関する研究 平成21年度厚生労働科学研究 (こころの健康科学研究事業)「思春期のひきこもりをもたらす精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究」総括・分担研究報告書, 67-101.
- 古志 めぐみ・青木 紀久代 (2017). ひきこもり状態にある若者は自己変容をどのように志向するか カウンセリング研究, *50*, 61-72.
- 古志 めぐみ・青木 紀久代 (2018). ひきこもり状態にある本人を対象とした研究の動向と課題 お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要, *19*, 13-23.
- Krieg, A. & Dickie, J. R. (2013). Attachment and hikikomori: A psychosocial developmental model. *International Journal of Social Psychiatry*, *59*, 61-72.
- 久保 浩明 (2019). ひきこもり者の家族を対象とした介入に関する研究動向と課題 九州大学総合臨床心理学研究, *10*, 69-76.
- 倉本 英彦 (2003). ひきこもりの予後 精神医学, *45*, 241-246.
- 蔵本 信比古 (2008). 社会的ひきこもりに関する心理的特性の検討 心理臨床学研究, *26*, 314-324.
- 草野 智洋 (2012). 大学生におけるひきこもり傾向と人生の意味・目的意識との関連 カウンセリング研究, *45*, 11-19.
- 松本 剛 (2003). 大学生のひきこもりに関連する心理的特性に関する研究 カウンセリング研究, *36*, 38-46.
- 村澤 和多里 (2012). 再帰のプロセスとしての「ひきこもり」 心理科学, *33*, 61-74.
- 村澤 和多里 (2017). 「ひきこもり」概念の成立過程について—不登校との関係を中心に— 札幌学院大学人文学会紀要, *102*, 111-135.
- 中地 展生 (2016). ひきこもり支援に関する文献展望 帝塚山大学心理学部紀要, *5*, 65-78.
- 内閣府 (2016). 若者の生活に関する調査報告書 内閣府政策統括官 (共生社会政策担当)
- 内閣府 (2019). 生活状況に関する調査 内閣府
- 野村 あすか (2013). 小・中ひきこもりに関する研究展望 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), *60*, 103-110.
- 野中 俊介・境 泉洋 (2014). ひきこもり状態が Quality of life に及ぼす影響 心理学研究, *85*, 313-318.
- Oh, W., Rubin, K. H., Bowker, J. C., Booth-Laforce, C., Rose-Krasnor, L., & Laursen, B. (2008). Trajecto-

- ries of social withdrawal from middle childhood to early adolescence. *Journal of Abnormal Child Psychology*, *36*, 553-566.
- Partridge, T. (2003). Biological and caregiver correlates of behavioral inhibition. *Infant and Child Development*, *12*, 71-87.
- Perez-Edgar, K., Bar-Haim, Y., McDermott, J. M., Chronis-Tuscano, A., Pine, D. S., & Fox, N. A. (2010). Attention biases to threat and behavioral inhibition in early childhood shape adolescent social withdrawal. *Emotion*, *10*, 349-357.
- Perez-Edgar, K., Schmidt, L. A., Henderson, H. A., Schulkin, J., & Fox, N. A. (2008). Salivary cortisol level and infant temperament shape developmental trajectories in boys at risk for behavioral maladjustment. *Psychoneuroendocrinology*, *33*, 916-925.
- Reznick, J. S., Hegeman, I. M., Kaufman, E. R., Woods, S. W., & Jacobs, M. (1992). Retrospective and concurrent self-report of behavioral inhibition and their relation to adult mental health. *Development and Psychopathology*, *4*, 301-321.
- Rubin, K. H. (1982). Non-social play in preschoolers: Necessary evil?. *Child Development*, *53*, 651-657.
- Rubin, K. H. & Asendorpf, J. B. (1993). Social withdrawal, inhibition, and shyness in childhood: Conceptual and definitional issues. In Rubin, K. H., & Asendorpf, J. B. (Eds.), *Social withdrawal, inhibition, and shyness in childhood* (pp. 3-18). New York: Psychology Press.
- Rubin, K. H. & Barstead, M. G. (2014). Gender differences in child and adolescent social withdrawal: A commentary. *Sex Roles*, *70*, 274-284.
- Rubin, K. H., Burgess, K. B., & Hastings, P. D. (2002). Stability and social-behavioral consequences of toddlers' inhibited temperament and parenting behaviors. *Child Development*, *73*, 483-495.
- Rubin, K. H. & Coplan, R. J. (2004). Paying attention to and not neglecting social withdrawal and social isolation. *Merrill-Palmer Quarterly*, *50*, 506-534
- Rubin, K. H. & Coplan, R. J. (Eds.). (2010). *The development of shyness and social withdrawal*. New York: Guilford Press.
- (ルビン, K. H. コプラン, R. J. 小野 善郎 (監訳) (2013). 子どもの社会的ひきこもりとシャイネスの発達心理学 明石書店)
- Rubin, K. H., Coplan, R. J., & Bowker, J. C. (2009). Social withdrawal in childhood. *Annual Review of Psychology*, *60*, 141-171.
- Rubin, K. H., Kennedy, A. R., & Bowker, J. C. (2010). Parents, peers, and social withdrawal in childhood: A relationship perspective. In Gazelle, H., & Rubin, K. H. (Eds.), *Social anxiety in childhood: Bridging developmental and clinical perspectives. New Directions for Child and Adolescent Development*, *127* (pp. 79-94). San Francisco: Jossey-Bass.
- Rubin, K. H., Nelson, L. J., Hastings, P., & Asendorpf, J. (1999). Transaction between parent's perceptions of their children's shyness and their parenting styles. *International Journal of Behavioral Development*, *23*, 937-957.
- 齋藤 万比古・中嶋 豊爾・伊藤 順一郎・皆川 邦直・弘中 正美・近藤 直司・堀口 逸子 (2010). ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン 平成21年度厚生労働科学研究費補助金 (こころの健康科学研究事業) 「思春期のひきこもりをもたらす精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究」
- 齋藤 環 (1998). 社会的ひきこもり—終わらない思春期— PHP 研究所
- 齋藤 環 (2002). 「ひきこもり」救出マニュアル PHP 研究所
- 佐藤 隆也 (2018). ひきこもりの支援の変遷と課題 川崎医療福祉学会誌, *28*, 27-36.
- Smith, K. A., Hastings, P. D., Henderson, H. A., & Rubin, K. H. (2019). Multidimensional emotion regulation moderates the relation between behavioral inhibition at age 2 and social reticence with unfamiliar peers at age 4. *Journal of Abnormal Child Psychology*, *47*, 1239-1251.
- Sullivan, H. S. (1953). *The interpersonal theory of psychiatry*. New York: Norton.
- (サリヴァン, H. S. 中井 久夫・宮崎 隆吉・高木 敬三・鑪 幹八郎 (共訳) (1990). 精神医学は対人関係論である みすず書房)
- 諏訪 真美 (2006). 今日の日本社会と「ひきこもり」現象 医療福祉研究, *2*, 23-29.
- 諏訪 真美・鈴木 國文 (2002). 「一次性ひきこもり」の精神病理的特徴 精神神経学雑誌, *104*, 1228-1241.
- 鈴木 典子・小此木 加江 (2000). 性別とひきこもり 狩野 力八郎・近藤 直司 (編) 青年のひきこもり (pp. 54-66) 岩崎学術出版

- 忠井 俊明・本間 友巳 (2006). 不登校・ひきこもりと居場所 ミネルヴァ書房
- 竹中 哲夫 (2010). ひきこもり支援論一人とつながり, 社会につなぐ道筋をつくる— 明石書房
- 田中 千穂子 (2001). ひきこもりの家族関係 講談社
- 谷田 征子・青木 紀久代・岩藤 裕美・古志 めぐみ (2016). ひきこもりはどのように捉えられているのか—海外で発表された文献レビュー— お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要, 17, 1-11.
- 塚田 光太郎・幸田 るみ子 (2015). ひきこもり傾向を示す青年の心理的特徴—誇大型・過敏型の自己愛および攻撃性との関連— 桜美林論考. 心理・教育学研究, 6, 27-44.
- 東京都青少年・治安対策本部 (2008). 実態調査からみるひきこもる若者のこころ 平成19年度若者自立支援調査研究報告書 東京都青少年・治安対策本部総合対策部若年者課
- Umeda, M. & Kawakami, N. (2012). Association of childhood family environments with the risk of social withdrawal (*hikikomori*) in the community population in Japan. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, 66, 121-129.
- 渡部 麻美・松井 豊・高塚 雄介 (2010). ひきこもりおよびひきこもり親和性を規定する要因の検討 心理学研究, 81, 478-484.
- Wei, H. S. & Chen, J. K. (2008). Social withdrawal, peer rejection, and peer victimization in Taiwanese middle school students. *Journal of school violence*, 8, 18-28.
- Wong, Victor C W. (2009). Youth locked in time and space? Defining features of social withdrawal and practice implications. *Journal of Social Work Practice*, 23, 337-352.
- 矢嶋 聡子・根本 橘夫 (2002). 女子大学生のひきこもり傾向と親の養育態度 東京家政学院大学紀要 人文・社会科学系, 42, 111-116.
- 山本 健治 (2008). ひきこもりの心理特性と精神的自立との関連性—高校生の意識調査結果の分析から— 佛教大学大学院紀要, 36, 91-101.
- Zarra-Nezhad, M., Kiuru, N., Aunola, K., Zarra-Nezhad, M., Ahonen, T., Poikkeus, A. M., ...Nurmi, J. E. (2014). Social withdrawal in children moderates the association between parenting styles and the children's own socioemotional development. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 55, 1260-1269.

ABSTRACT

Arrangement of concepts related to social withdrawal and a review of social withdrawal at the domestic and overseas levels

Ryosuke KOBASHI

In recent years, social withdrawal (*hikikomori*) has become a serious social problem in Japan. Moreover, social withdrawal is likely to become a global issue. Many studies have been conducted to investigate social withdrawal and to assess the need for early intervention and support for social withdrawal. This study reviewed concepts of related to social withdrawal at the domestic and overseas levels; it also clarified the trends and future direction of studies regarding social withdrawal. First, this study indicated that many concepts and definitions of social withdrawal prevailed at the domestic and overseas levels. In Japan, social withdrawal is mainly defined as the phenomenon of staying at home for more than six months; this phenomenon occurs beyond puberty and adolescence and is related to experiences of school refusal. On the other hand, overseas definitions of social withdrawal widely refer to loneliness and isolating of oneself from peers. Second, this study identified factors involved in social withdrawal and explanatory factors were further categorized as demographic, intrapersonal, and environmental factors. Moreover, this study indicated that a tendency to account for pursuing the support methods for social withdrawal in Japan, alongside investigating the cause of social withdrawal at the overseas level. Finally, this study suggested that studies of social withdrawal at the domestic and overseas levels share a complementary relationship. Thus, overseas knowledge regarding the causes of social withdrawal is probably a good resource for designing early intervention and support for social withdrawal in Japan. Further study is thus essential to consider the biological and temperamental factors involved in social withdrawal, apprehend social withdrawal as a process of interacting with multiple factors, and conduct a longitudinal survey relating to social withdrawal.

Key words: *hikikomori*, social withdrawal, review, domestic and overseas levels